Bluff Archives News Letter

第2号　2024年12月
発行　　NPO法人横浜山手アーカイブス

開港5都市景観まちづくり会議2024横浜大会 山手分科会

横浜山手アーカイブスは、11月23～25日横浜市で開催された「**開港5都市景観まちづくり会議2024横浜大会**」にて、他のボランティア団体とともに企画運営を担った。本大会は安政5年に開港港となった５都市の市民が景観やまちづくりの課題を共有し、相互に交流することを目的として毎年持ち回りで開催されているもので、横浜での開催は６回目。山手分科会は、24日イギリス館に集合し、横浜市都市整備局都心再生課より「山手のまちの成り立ち・まちづくり活動」、同都市デザイン室より「山手の歴史を生かしたまちづくり」についてレクチャーがあり、記念撮影の後、参加者18名が３グループに分かれて「まち歩き」に出かけ、そのあと意見交換が行われた。

山手の歴史的建造物をめぐる

まち歩きは横浜シティガイド協会が道中のガイドを務め、山手の拠点を巡った。イギリス館を出発し、まず地元企業が保存した**山手133番館**へ。山本氏（㈱三陽物産社長）より土地建物取得の経緯や建築家、敷地内ブラフ積擁壁、居住した人々のこと、修復ポイント、洋館を残す意義などが語られる。山本氏の熱い説明と心のこもったおもてなしに参加者は感激し、「素晴らしい！」という声が何度も上がった。続いて**ブラフ99ガーデン**へ。隣地の港の見える丘公園拡張部に移築が予定されている岩田邸について、都市デザイン室より資料を見せながら行政による移築の事例が説明された。

昼食を挟んで、午後は**山手資料館**へ。この資料館は1970年代に故本多正道氏（㈱勝烈庵社長）によって、諏訪町に移築されていた本牧上台の中澤兼吉邸の洋館部分を移築したもので山手の景観形成の嚆矢になったという説明があった。次に**エリスマン邸**前へ移動。緑の協会より横浜市が所有する「山手西洋館」の管理や運営について、続いて都市デザイン室より震災復興住宅４棟が残る69番の移り変わりについて説明があり、山手80番館遺跡、山手76番館、山手69番地洋館群を巡った。最後に**山手237番館**へ。すでに復元工事が始まっているため、ヘルメットをつけて内部へ。工事に携わる兼弘氏（㈱ユー・エス・シー）が設計図を見せながら、壁や柱、窓枠、バルコニー、暖炉など修復のポイントを説明。参加者からは壁の塗装や柱の釘跡のマーキングについての質問も出て、他館の復元工事の経験を活かしながら出来るだけ元通りの復元に臨む姿勢に高い関心が示された。まち歩きにはそれぞれ違う状況を呈する建物事例が選ばれ、保存活用を考える上で大いに役立つ見学会となった。

横浜の異国情緒の秘訣は何か

まち歩き後、イギリス館に戻り、振り返りと意見交換が行われた。参加者は４つのグループに分かれ、「まち歩きで一番印象に残ったもの」「異国情緒の秘訣～景観保全に大事なことは何か。どうすれば景観保全につながるか」を記入してもらい、これをもとに活発な意見交換が行われた。最後に各グループのファシリテーターが意見を集約し、発表を行った。

参加者からは「山本氏の熱量が半端ない。133番館を見て活用が大事だと思った」「山手は緑が多い」「建設会社の技術が凄い」「住宅地として残すのか、観光資源なのか、地域住民の意見を聞いては」「開国以来の人のDNAに横浜は凄いものがあるから今も今後も続く」「メンテナンスのための仕組みや思いがある」「市民が自分たちで企画してまちづくりをする＝行政との協働」「人の"思い"が最終的にまちを作っていく」「まずファン（好き）になってもらい、活動につなげ、共有できる仕組み（マネタイズ）作りが大切」などの意見が出された。横浜の異国情緒の秘訣の核心には「愛（熱意）」があり、それを活動に活かし、事業を収益化する仕組みを作ることが景観保全につながると言えるかもしれない。翌25日、市庁舎１階で開催された全体会議で分科会報告を行った。今回の分科会では他都市のまちづくり関係者の意見も聞くことができて、大変有意義な活動体験となった。（N）